

演者(田中正彦撮影)

2026年2月23日

千葉県生物学会総会・基調講演要旨 (会誌投稿原稿)

「日本列島の野鳥を探る、都市と自然を彷徨って80年」

都市鳥研究会顧問(前代表) 唐沢孝一

■未来は予測できない。

人は誰しも歴史を背負って生きている。人生は無数の偶然に支配されながらも、過去の出来事の一つ一つの意味するところの関連性を追求することにより、目には見えない複雑な糸でつながった history(ギリシャ語の historia) となり、偶然とは思えない必然性を帯びてくる。これこそ我が人生であるかのように思えてくる。人は history なしには生きられないし、「history を創造する動物である」と言ってもよいだろう。その「偶然」と「必然」の織りなすドラマを象徴しているのが、房総スカイラインの道路標識、「イノシシによる落石注意」ではなかろうか。(写真①) 落石は不運だけでなく、幸運をもたらすこともあるのだが、落石を予測するのは困難だ。グレゴリー・ベイトソンは、著書『精神と自然』(思索社)の中でいみじくも未来は予測できないと断言している。ここでは一生物学徒がたどった80余年の history の一端を演題とさせていただいた。



写真①房総スカイラインの道路標識「イノシシによる落石注意」

■自然と都会の狭間で

演者は1943(昭和18)年に群馬の山村、嬭恋村で生まれ現在地は東京に隣接する千葉県市川市である。中学校時代に理科の本多(宮崎)弘先生との出会いを通して、実家の裏山でシジュウカラの繁殖生態を研究した。後に大学で動物学を専攻し、さらには都市鳥研究へとつながり、そして今、日本列島に生息する鳥類の全体像を探ろうとしている。こうして振り返った時に見えてくるこの景色、もし、本多先生との出会いがなかったら、全く別の世界が展開していたかも知れない。

市川市という都会でくらしながらも、幼少期の自然体験が心のどこかに漂っており、今なお都会生活に納得できない自分がそこにいる。私を支えているのは、「都会」と「自然」という矛盾した対立軸であり、都会にはいまだなじめず、さりとて自然に恵まれているだけでも満足できず、両極の間を彷徨ってしまう。そんな揺れ動く人生にあって、優れた先人との出会いがあり、幾多の書籍にも勇気づけられ、また戦後という平和な時代にも恵まれた。



もし、人生で最も大きな影響を受けた人を「一人だけあげよ」と問われたら、私は迷うことなく大学で英文学を受講した外山滋比古先生の名あげたい。(写真②)それは文学の世界をはるかに超えたものであり、日本や日本人とは何かを改めて問うものであった。将来的にも文学とは無縁であろう我々理学部の学生にこそ言語の奥深さを伝えたい、先生のそんな熱意が伝わってきた。後に教壇に立ったとき、文系の生徒にこそ生命の不思議や自然環境の重要性を伝えたいと思ったのも先生の影響だったにちがいない。

写真②言語の奥深さを熱弁する外山滋比古先生

もし「もう一人」、研究の上で影響を受けた人をあげよと言われたら、朝永振一郎先生の大学入学時の学長式辞を思いだす。「この世は、本当は未知の世界で覆われており、分かっていることはほんの一部にすぎない」、そんな内容であった。高校までの、解答のある問題ばかり解いてきた受験生にとって、これほどの衝撃はなかった。自然や生物の不思議さに気づき、その不思議に満ちた扉の門をたたこうとする、まさにその姿勢を問われたのだった。全てがリセットされ、大学での新しい一歩が始まった。

■聖地「山」で学んだこと

生物学を学びつつ、生命とは何か、人間とは何かを問い続けるうちに、いつしか自然科学のみならず文学や文明、人間学や民俗学などにも興味の幅が広がった。北原白秋やシェイクスピア文学に没頭した時期もあった。和辻哲郎著『風土』や梅棹忠夫著『文明の生態史観』をワクワクしながら読みあさった。(後に、これらが都市鳥研究にどれほど役立つことになるかなど、当時、気づくはずもなかった)

都会での学生生活に不満はなかったが、しかし、根源的なところで、希薄な人間関係になじめず、都市に対する漠然とした不安や不信がくすぶっていた。「孤独は山になく、都会の人と人の間にある」(『人生論ノート』三木清著)にも共鳴するものがあった。

そうしたモヤモヤを吹き飛ばし、精神のバランスを保ってくれたのが岩や氷の世界、アルピニズムへの憧れであった。山岳部に入部し、濃厚な人間関係の中で休暇のほとんどを槍や穂高、剣、富士山、北岳、聖岳、八ヶ岳、東北の飯豊山、利尻や旭岳などで過ごした。谷川岳にあった山岳部の山小屋(白樺小屋)を拠点に沢登りにも興じた。一本のザイルで結ばれた剣岳の岩場や富士山での冬山訓練などでは、岳友との相互の信頼関係が強く求められた。山頂に立つには、「何よりも自身に対してストイックなまでに厳しくあれ」と、その当時は考えていた(写真③)。



写真③鹿島槍ヶ岳山頂(1965年)。鉄潤一氏(右、物理学科)と演者(左)

■都立両国高校に赴任

教師としての初任地は千葉県立市原高校であった。沼田眞先生に紹介され千葉県生物学会に入会。1966年頃である。市原では田辺盛光先生の後について市内のおもな森林を調査した。大福山の照葉樹林で、20m四方のコロラートを設置し森林の階層構造を調査したことなど昨日のこのように思いだす。

一方、生徒に対しては山岳部流に厳しく臨んだため、今となってはやりすぎを反省するばかりである。が、市原の生徒たちは人情深く、今もって同窓会に招いてくれる。養老川流域の豊かな自然にも、生徒にも恵まれた。それにも関わらず都会への思いを断ち切れず、1970年、都立高校に異動。下町の両国高校に赴任した。この偶然の人事が、後に都市鳥研究へとつながった。

両国高校では教師としての資質が日々試された。大学では学んだこともないDNAやタンパク質合成などを教室で教え入試問題を解説した。加えて文科省の教科書「高校生物」の編纂や学習参考書・問題集の執筆など、いくら時間があっても足りない毎日であり、心身がすり切れていく不安を感じた。

勤務のストレスから開放させてくれたのは生物部の生徒と出かけた観察会や夏合宿であった。部員の多くは優秀で個性的、卒業後も各分野で一廉(ひとかど)の人となり活躍している。

生物教師は、教科書を教えるだけでなく「自身もテーマをもって研究することが大切だ」とよく言われる。「教師が目を輝かせて生物と向き合っている」、その後姿も生物教育なのかも知れ

ない。両国高校では大滝末男先生、薄葉重先生がその見本を示されていた。大滝先生は『日本水生植物図鑑』(北隆館)を、薄葉先生は『虫こぶハンドブック』(文一総合)を出版された。当時の両国高校は、授業は厳しかったが自由で研究もできる、そんな環境であった。

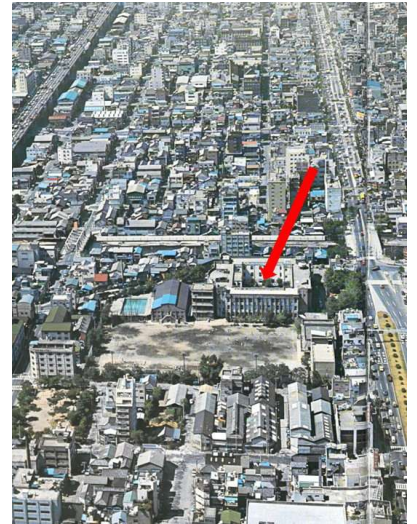
在職中の1979年、東京都から千葉大学沼田眞研究室での内地留学(長期研修)が認められた。日々の勤務から開放され、この時とばかり全国の探鳥地を巡りまわった。天売島(海鳥)、道東(草原の鳥)、富士山麓や亜高山帯の鳥、出水のツルの越冬地など。長年の夢であったインド洋セーシェル諸島のアジサシ類のコロニー、アフリカ(ケニヤ)のサバナの野生動物も観察できた。

■都市鳥研究の始まり

1986年、演者にとって衝撃的な出会いがあった。出会いと言っても人ではない。鳥である。両国高校(旧校舎)の中庭でキジバトが繁殖したのだ。(写真④)|

写真④キジバトが繁殖した両国高校中庭(矢印 1986年)

1970-80年代は深刻な都市公害の時代であった。人が逃げ出したくなるような都会に、山野で暮らすキジバトがなぜ進出してきたのだろうか?そんな素朴な疑問の解を求め、都市とはなにか、野鳥とはなんなのかを知るべく都市鳥研究が始まり、鳥仲間が集まって都市鳥研究会を結成した。「トヨタ財団研究コンクール、第3回身近な自然をみつめよう」にも応募した。審査員は小原秀雄(人間学)、柴田敏隆(山階鳥研)、加藤幸子(芥川賞作家)、谷川俊太郎(詩人)など多士済々。



写真⑤トヨタ財団第3回研究コンクール 特別賞贈呈式

審査や討論を通して、調査研究の方法も固まり、客観的なデータも蓄積されるようになった。オーバーな言い方ではあるが、都市鳥を介して都市文明をかい間見ているかのような気分であった。2年半に及ぶ研究を通して1987年にグランプリ(総額1450万円)を受賞した。(写真⑤)一人ではとても成し得るものではなかった。20世紀後半に新しく出現した都市環境を舞台に、都市鳥はどう人工環境に適応し進化していくのだろうか。朝永先生の言う、未知の世界の門をたたき思いであった。

■日本列島の野鳥を求めて

都立高校を退職してフリーになると、軸足は自ずと「都会」から「自然」へと傾いてきた。幼少期の孺恋村での体験、山岳部で登った日本列島の山々のこと、千葉大学での長期研修時に訪ねた日本各地の野鳥や自然などへの思いが再燃した。TVや書籍、ネット情報などの既存の知識ではない、自らが掴み取った生の情報に価値を見いだすようになった。「現地に立って、思いっきりその空気を吸いながら全身で野鳥や自然を感じとりたい」、そんな思いにかられて列島各地を訪ねる旅が始まった。70歳を過ぎてからの再出発だった。

南北に細長く多様な環境を有する日本列島では644種もの野鳥が観察されている。その列島で暮らす鳥類を訪ね、北海道から西表島や小笠原諸島まで、島を巡り、山に登り、越冬地や繁殖地を訪ね歩いている。そして80歳を過ぎたころ、日本に生息する鳥類の輪郭がおぼろげながらではあるが見えはじめてきた。今はまだ大まかなデッサンの段階ではあるが、日本の野鳥の特徴として以下(1)~(5)の5項目があげられるのではないかと考えている。ここでは各項目に写真各1点を添え講演を終了させていただく。

(1) ウミネコやオオミズナギドリなどの海鳥のコロニー

蕪島(青森県八戸市)は、現在は陸続きだがかつては島であった。数万羽のウミネコのコロニーがあり、1922(大正11)年、国の天然記念物に指定された。

ウミネコやオオミズナギドリなどのコロニーは日本列島各地に存在する。その背景には、列島周辺を流れる海流のもたらず豊かな漁場の存在、天敵が近づけない孤島や断崖の存在が欠かせない。

写真⑥ ウミネコのコロニー(蕪島)



(2) 津軽海峡や対馬海峡などを渡る鳥類

本州ではメジロは留鳥だが、北海道では夏鳥である。春3月、本州最北端の龍飛崎に立つと、本州から北海道へメジロの群れが渡っていく。キジバトやアオバト、ヒガラ、シジュウカラなどの群れも続々と海峡を渡っていく。

写真⑦ 津軽海峡を渡るメジロの群れ(青森県)。

津軽海峡や対馬海峡を渡る鳥たちの観察を通して、夏鳥、冬鳥、留鳥などの如何に関わらず日本列島の鳥類のダイナミックな動態が見えてくる。



(3) 高山に適応したライチョウやホシガラスなど

ライチョウは、南北日本アルプス、中央アルプスなどの高山帯で繁殖する代表的な高山鳥である。氷河期に日本列島を南下し、温暖化と共に高山に逃れて生き延びてきた遺存種である。日本のライチョウは世界のライチョウ分布の南限であり、地球温暖化の影響を最も受けやすい鳥類でもある。

高山帯、亜高山帯には、他にもホシガラス、カヤクグリなどの高山鳥が生息している。また、亜高山帯などで繁殖するオオルリやキクイタダキなどは山地と平地とを季節的に移動し日本列島各地の鳥相を豊かなものになっている。

写真⑧ 立山・室堂のライチョウ(雄、富山県)

(4) よみがえったツルやガンなどの大型水鳥

ハクガンやコクガン、シジュウカラガンなどのガン類は、一度は日本の空から激減し、消滅寸前にまで追い込まれた。

長年の保護活動や生態研究を通して八郎潟や伊豆沼、蕪栗などで越冬数が増加。一部は房総半島でも越冬するようになった。

他方、鹿児島県出水市ではマナヅル、ナベヅルなどのツル類の越冬数が増加している。ツルもガンも、限られた越冬地への集中によるリスク(鳥インフルエンザなど)が懸念されている。

写真⑨ 越冬中の約2000羽のハクガン(秋田県・八郎潟)



(5)南西諸島の日本固有種（ルリカケス、ヤンバルクイナなど）



ヤンバルクイナは沖縄北部のやんばるの森で捕獲され、1981年に日本固有種の新種として認定された。南西諸島には他にもノグチゲラ(沖縄本島北部)、ルリカケス(奄美大島)などの固有種をはじめ固有亜種が多数生息しており、日本列島の鳥相を特徴づけている。

固有種の保護にあたっては、生息環境の保全、ロードキル、天敵のマングース対策など多くの課題を抱えている。

写真⑩ 樹上で夜を過ごすヤンバルクイナ(沖縄県・やんばるの森)

(唐沢孝一・記)